

栗木義夫 KURIKI Yoshio

## CULTIVATION－耕す彫刻

2023.4/29 [Sat.] – 6/25 [Sun.]

主催 清須市はるひ美術館

### 鑑賞にあたってのご注意

- \* 展示作品、展示ケースには触れないでください。
- \* 床にも作品がございます。足元にご注意ください。
- \* 本展では展示作品を撮影していただけます。  
撮影の際は、以下の注意事項をよくご確認ください。
  - ・モニター上映されている動画の撮影はご遠慮ください。
  - ・フラッシュ、三脚、自撮り棒などの使用はご遠慮ください。
  - ・撮影の際は周囲の鑑賞者の妨げにならないようご配慮ください。
  - ・展示作品との接触にご注意ください。
  - ・撮影した写真は私的範囲内でのご利用に限ります。

\* 作品のキャプションは以下の順番で記載。

作品番号／作品名／制作年／素材／サイズ（幅 × 奥行 × 高さ）

\* 四角い枠内に記載したテキストは、本展の開催にあたり栗木義夫氏と対話する中でお聞きしたお話を作品解説用に編集したものです。展示作品とあわせてお楽しみください。

## エントランス

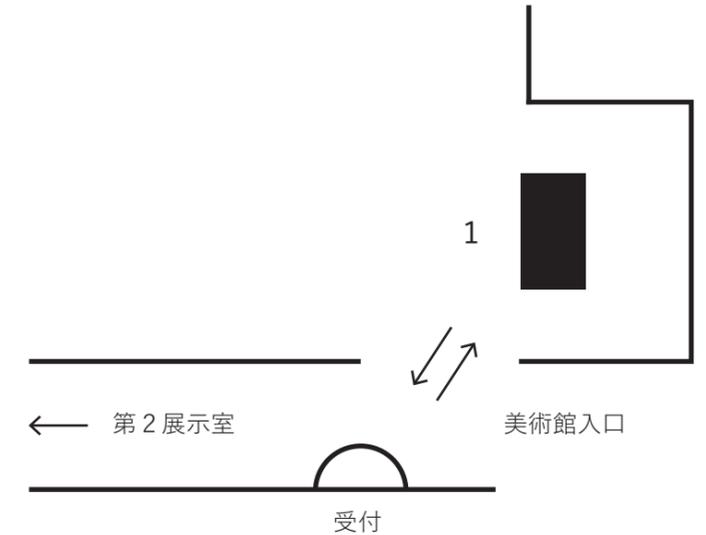
1.

### OPERATION

1990年

鉄

128 × 60 × 245cm

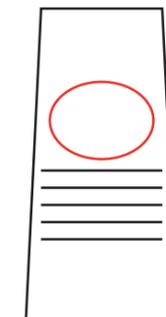


2枚の湾曲した鉄板が上部で接合されて支え合うように自立しています。溶接の熱によって鉄が曲がる作用を利用して制作された作品です。本作は当時、野外に展示されました。1960年頃から国内各地で野外彫刻展が行われましたが、栗木も1981年の「大垣市野外彫刻展」(岐阜)に出品しています。また、岐阜県大垣市くまの南公園には、栗木の野外彫刻作品《虹》が恒久設置されています。

- 当作品のみ、手で触れることができます。
- ・ 下図の赤丸○の部分にやさしく触れてください。
- ・ 手指消毒液をご利用ください。ビニール手袋をご希望の方は美術館受付にお声がけください。
- ・ 強く押ししたり叩くような触れ方はご遠慮ください。



《虹》1995年  
撮影地：大垣市くまの南公園



← タッチ OK

← 溶接のラインは触れないでください。鋭くかかっているところがあります。

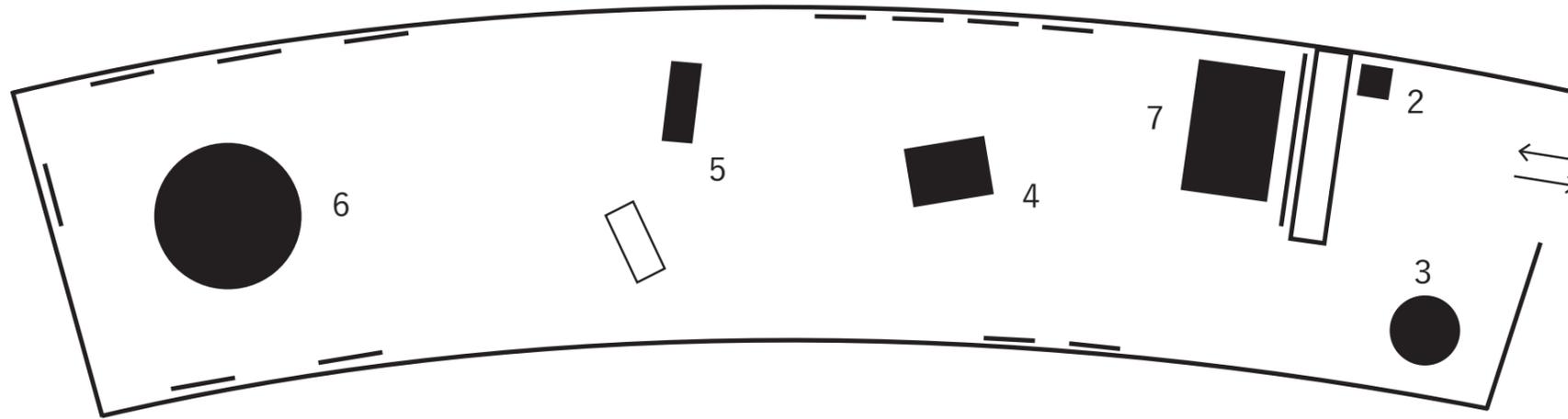
### 野外彫刻の制作

大学院時代、各務原市（岐阜）の溶接ができる工場で作らせてもらったことがあった。自分のやりたいことを説明したら、実験的なことを面白がってくれて、親切にアドバイスをくれたりもした。

当時は各地で野外彫刻展が行われていたが、石や鉄を使った大きな作品を作りたいと思った時、重要なのは身近にそれをやれる環境が

あるかどうか。学生であれば、先生や身近な人で石や鉄などを扱える人、モニュメンタルな仕事をしている人がいるかどうか。各務原市の工場は下請け工場だったのでとても厳しい仕事をしていて。ガス溶接の国家資格を持っている人や、分厚い鉄を自在に曲げるような人たちがいて、自分もそういう仕事を身近に見ていて感覚が麻痺していったのだと思う。

展示室 2



2.  
**Untitled**  
1979年  
鉄  
40×40×168cm

大学4年生の時に1年かけて手掛けたという本作は、当時の友人をかたちづかったものです。この頃から栗木は鉄を素材として扱うことを積極的に考え始めました。  
栗木は人体を彫刻することで「人が歩く、立つ、そこにいる、ということはどういうことか」という根源的なテーマと向き合います。

3.  
**Untitled**  
1996年  
鉄  
132×124×178cm

4.  
**CULTIVE**  
1989年  
鉄、和紙  
サイズ可変（鉄の作品：181×90×8cm）

栗木は学生の時、鉄板に溶接の熱を加えることで自身の意図していないかたちが生まれることに気づき、その後の制作に取り入れていきました。当時は思い描いたかたちをつくることよりも、制作に関わる行為自体に関心をもっていったと言います。1970年代に国内で広まった美術動向の「もの派」にも影響を受けていました。  
本作では鉄板の片面に3回、もう片面に2回溶接を施すことで、ゆるやかに起伏したかたちがつくられています（本展では3回溶接した面を表にして展示しています）。壁面に展示されている紙作品は、鉄板の表裏に和紙を貼り付けて剥がし取り表面のサビを写し取ったものです。会場奥へ向かって右手の4枚が1989年、左手の2枚が2023年に制作したものです。  
鉄の表面を和紙に写し取る行為は、版画などに見られるイメージの転写というよりも、鉄の作品が含む時間の蓄積を浮かび上がらせる行為と捉えることができるでしょう。

5.  
**OPERATION**  
1989年  
鉄、和紙、接着剤  
鉄の作品：85×75×178cm  
和紙の作品：85×70×177cm

6.  
**Untitled**  
1993年  
鉄、再生紙  
サイズ可変（鉄の作品：直径200cm / 高さ200cm）

本作はこれまでも栗木の個展にたびたび出品されていますが、その都度かたちが再構成されています。初出品した1993年のギャラリー山口（東京 | 2010年閉廊）では筒状でしたが、1994年のウエストベスギャラリーコヅカ（愛知）では立方体のようなかたちに変化します。そして2016年 masayoshi suzuki gallery（愛知）で再び円柱形に戻り、屋根のようなものが加えられました。これらはいずれも田畑の干しわらのかたちをイメージしているそうです。  
壁に展示されている再生紙の作品は、カットする前の鉄板に新聞紙などを水で溶かして貼り付け剥がし取ったものです。

7.  
**Untitled**  
2006 - 2023年  
鉄、陶、油彩、キャンバス、その他  
サイズ可変

鉄のテーブルを中心に立体と絵画によって構成された作品です。本作では「手探りで思考すること（机に向かって手を動かしながら考える）」という、栗木の作品制作に対するひとつの姿勢が表れています。具体的なかたちを生み出す立体と、心のなかに浮かんだイメージを描き出す絵画。特定の手法にとらわれず双方の制作を行き来することは、栗木にとって頭の中を耕す行為といえるのかもしれません。

———大学時代、友人との制作

大学に入る前、美術予備校では、表面を写し取ることがよしとされていた。当時は「素写（そしゃ）」という言葉がはやっていて、ものを素直に見たまま写し取ることをみんなやっていた。石膏像のシミまで描写するとか。今考えると彫刻とは関係ない行為だったように思う。  
大学に入り、ものの表面を写しとることが彫刻ではないと教えられた。考え方を切り替えるため、授業後に遅くまで残って同じクラスの友人と頭像をつくり合いながら、先生達の言っていることはどういうことなのか、議論を重ねていた。



1993年



1994年



2016年

## 展示室 1

### 8.

#### Untitled

1979 - 2023 年

鉄、陶、油彩、クレヨン、ジェッツ、キャンバス、紙、その他

サイズ可変

展示室一室を使い、栗木がこれまで手掛けてきた作品を一望するように構成したインスタレーションです。ガラスケース内の壁に展示された絵画は、向かって右手が2010年にドイツで現地制作したドローイング群、左手が2012年に同じくドイツで個展を開催した際に発表したものです。

ステージ上の立体作品は、主に鉄と陶を組み合わせつつられています。一つひとつのかたちは栗木が生活の中で使用する日用品や、風景の中で目にとまったものをモチーフにしています。陶芸家の家系に生まれた栗木ですが、若い頃は作品の中で陶を扱うことに抵抗があったそうです。しかし、父親との関係の中で粘土に触れる機会が増え、自然と自身の制作にも陶を用いるようになったと言います。

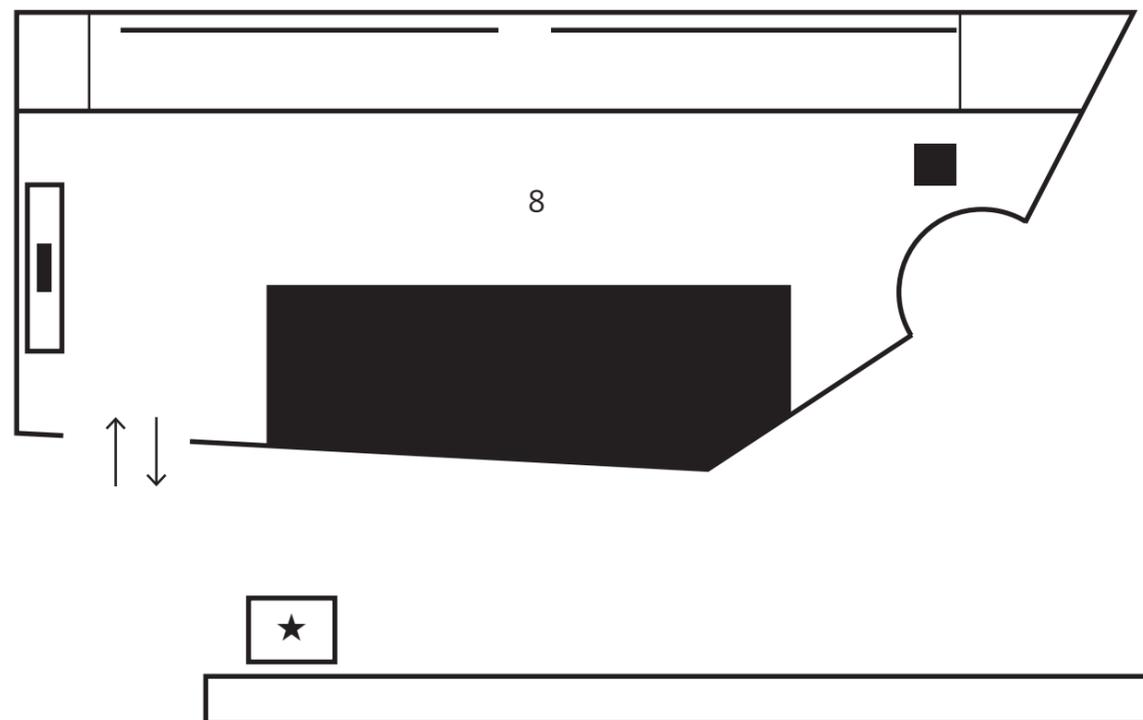
そして会場奥に展示されている四角い形状の作品は、人体彫刻(2.《Untitled》1979年)と同時期に制作されたものです。「人間が最後に入るスペースは何だろう」と考えた時に浮かんだ骨箱のかたちをモチーフにしています。中は空洞になっており、当時の写真や手紙など思い入れのあるものが封印されていると言います。鉄の堅牢な物質感と、周囲を溶接で埋め尽くす行為に「閉じ込める」という意味が込められています。

#### 鉄を扱うこと

大学1、2年生の時に木や石などの彫刻で扱われる素材は一通り習得していた。学部3年生の授業で、与えられた50日間の中で自分でテーマを決めて制作する授業があり、そこでは粘土以外の素材を使う決まりになっていた。その頃、周りの学生はもの派の作家に影響を受けていて、自分も鉄を扱いはじめたことや、当時制作した骨箱の作品のようにものだけでなく空間を意識を向けたことは、そういった影響の中で出てきた表現だと思う。

#### 絵を描くこと

当初、自分にとって描くことは、対象物をとらえるクロッキーや、立体を作るためのプラン(面)を平面に落とし込む行為だったが、ドイツで活動するアーティスト達と関わる中で、心のなかにあるもの描く「ドローイング」という方法を知り、そのような絵の描き方に挑戦するようになった。自分にとってドローイングをすることは、思考がリフレッシュされて新たな可能性を見つけるきっかけになったり、考えていることをビジュアル化し、アップデートし、そこからまた触発されていく、そんな循環がうまくいく方法だと思っている。



#### ★

特別動画

栗木義夫と電気溶接

3'08

本展では、溶接を表現に用いて制作された作品を多数ご紹介しました。溶接とは、熱を用いて鉄同士をつなぎ合わせる手法です。栗木は鉄に熱を加えることでかたちに変化することや、溶接をしている時の集中力をともしなう行為の精神性、あるいは「何かを閉じ込める」という性質に関心を持ったことから、制作に取り入れたと言います。

本動画では特別に、栗木が溶接をしている様子をご覧ください。

<ご注意>

- ・動画内でまぶしい光が映ります。ご注意の上、ご鑑賞ください。
- ・本動画の撮影(動画、静止画とも)はご遠慮ください。